建國大學研究会
寄贈資料

# 例言

大東亞戰の開始は、アジア共榮の新秩序の確立竝にこれを重要なる內容とする世界共榮の新秩序の樹立に具體的な實現性を與うるに到つた。この方向は現代世界の動向として何人も疑ひ得ない所であり、經世の志を懷ける學徒は一齊にこの方向に於いて各自の專門とする研究を進めなければならぬ。同時に又この方向への關心を深め認識を廣めることは、一般の人々、殊に學修の途にある青年にとつては必須の要望となつて來た。我等は今この要望に應へる爲に此の新秩序建設叢書を逐次刊行し、聊かなりとも時務負擔の職責を果したい。

康德九年一月八日

建國大學研究院長

X-2-14

# 民族性格類型學

## —在滿諸民族の性格構造—

建國大學助教授　薄　田　司

一　現代の民族心理學……一
二　ヴントの民族心理學……三
三　民族研究の出發點……八
四　自然的性格と遺傳性格學……一四
五　性格類型學……二二
六　徵候學……三三
七　イエンシュの類型學……三八
八　民族性格類型學……五〇
九　在滿諸民族の性格構造……七三
一〇　心理學徒の任務……八二

360775
東洋文庫

# 一　現代の民族心理學

凡そ科學的研究にして理論的價値を有たないものは存しない。しかし、實踐的應用的見地からすれば、自ら時代が地域と共に當該研究の現實的價値を制約するものである。即ち時代により地域によつて要求せられるべき研究領域又は課題は制約されて提出されるものである。

而して吾々の研究は、地域的には日滿兩國の立場から制約されることは云ふまでもなく、時代的には現代的見地に立つて課題が提出されるべきで、かくして初めて現實的價値を有つことゝなるのである。

然らば、かゝる意味に於る現代の民族心理學とは如何なる課題を有つべきものであらうか。

私は、一言にして、吾々と共に生き吾々と共に行動をしてゐる民族の精神的特性の研究を任務とする民族心理學がこれであると考へる。吾々との交渉圏内にある現住の民族の研究を直接の課題とする場合に於てこそ、民族心理學が國家運營の實踐に役立つことが出來るからである。國の内外、平時戰時を問はず、あらゆる效果的政策の前提は民族の精神的特性に基づくべきものであるからである。

しかも、從來かゝる立場の下の民族心理學は比較的輕視され勝ちであり、就中日滿兩國に於る限りは殆んど全くないと云ひ得る狀態で、東亞新秩序建設のため甚だ遺憾と云はざるを得ない。それ故、こゝに敢へて筆を執つた次第である。

## 二　ヴントの民族心理學

ヴントの民族心理學は、豐富な資料から成る一大集成であつて、その大なる貢獻はこれを否定することが出來ないが、しかし彼の主要目的は、すべての民族に妥當する發達の法則を心理學的に解明することにあり、云はゞ一般的發達心理學の建設に向つて居り、のみならず個人心の交互作用としての彼の所謂民族心の純粹性を原始人の心性に於て見出さんとせる彼の研究の重點が原始文化におかれたことは、現代の吾々にとつて再考すべき問題でなければならない。

成る程、原始人の心性から現代人の心性が發達したにはちがひがないが、又たとへば幼兒時代が精神構造の形成に最も大きな意味を有ち、その後に於て加はるものはすべて性格の建設に比較的影響が尠ないやうに、精神的基礎の大半は原始

時代に成立してゐるとも考へられるが、しかし、この故に原始文化の研究を通して原始人の心性の探求に專心する傾向のあるヴント的方向のみが民族心理學の本道と云ふことが出來るであらうか。

これのみではない、民族心の考察の出發點は勿論原始時代におかなければならないとしても、それはヴントに於るが如く發達段階を劃するためにではなくて、むしろ發達の全過程を一つの連續的一系列と見做して、その底に横たはり流れるものを求むべきではなからうか。

更に云へば、しかもこれこそ特に注目・檢討すべきところであるが、現代要求される民族の差異的研究を放棄して殆んど顧みなかつたことに、尠くとも現代の民族心理學としてはその適格性を認め難いと考へられるのである。もつとも彼は初め、民族心の法則の發見を目指すものを本來の民族心理學と呼び、これに對し、民族精神の差異性に關するものを特殊的民族心理學と呼び、或は民族の性格學、心理的人種學、人種學の心理學的部門等と名付けて一應これを認めたのであつたが、その後彼は、ヒッレブラントのかゝる方面の研究を目してエッセイに過ぎないとし、民族性格學の科學性を否定し去つたのである。

一體、心理學が法則の定立を目標としたのは、自然科學に範をとつてこれにならはうとしたヴント的立場の本質であり、又ヴント前後の主潮で、この意味に於てヴントの民族心理學は、ヴント時代に要求された民族心理學であるといふことが出來るかも知れない。そして、この故に多くの學者がこれを民族心理學の本道として歩みつゞけて來たのであらう。

しかし、今や吾々はこの途行きをこそ反省しなければならないのであると思ふ。さきに述べた如く、現代の要求する民族心理學は、かゝる性格を有つものでは現實的價値が尠ない。ヴントによつて除外された部門たる諸民族の特殊的な精神部面の究明に向ふものでなければならないのである。

殊に滿洲國に於ては、複合民族國家なるが故に、何よりも先づ各民族の精神的特性を明かにする必要があり、日本としては、東亞新秩序建設のためにかゝる民族心理學的研究に俟つところがなければならない筈である。

何となれば、複合民族國家にせよ、東亞新秩序にせよ、かゝる民族心理學的基礎工事の上にこそ、初めて確乎たる建設が可能だからである。かゝる基礎なくして早急なる同化的政策をのみ事とするところには、決して眞の建設は達せられるものではなく、一歩誤れば只混沌のみが結果することゝなるだらうからである。

勿論、東亞諸民族のたとへば文化的同一性の存在を證明せんとすることも、決して無用ではなく、事實かゝる主張が聞かれ、これを支持しこれに共鳴する人達があるようであるが、同一性乃至類似性のみが協和と提携を齎らすものと考へるならば、これは決して妥當と云ふことは出來ない。

互ひに吾を知り他を知つて、夫々の長短を覺ることに於て、提携の必要は自ら覺られるからである。尠くとも、これが協和或は提携の一方途たることに思を致すべきであると思ふ。それ故吾々は、諸民族の精神的特性の差異を虞れるべきではない。むしろ、この差異を—もしありとすれば—互ひに生かし補ふことに於て協和・提携の必要性を自覺せしむべきなのである。

現代の民族心理學がかゝる任務を有つとすれば、然らばそれは如何なる道をとるべきであらうか。

## 八　民族性格類型學

イエンシュの類型論は、周知の如く直觀像素質者の問題に初まり、やがて共感覺（ジネステシー）の研究にうつり（S型の名稱はこの名殘りである）、更に展開をつゞけてつひに前述の如き類型學に發展したのであるが、彼が差異的民族心理學に道を開かうと提唱したのは、初期の直觀像素質の研究結果に基づいてゐる。

即ち、直觀像素質者は、フランスの少年の間に、ドイツの少年に於ると全く比較にならぬ程多數に且つ強く分布され、のみならず、ドイツ人に於ては殆んど常に消えるのが常である成熟後に於てさへ見出され、更に又、ドイツの少年に於ては頗る稀であり、しかも顯著でないB型（直觀像の一種で、高度の「可塑性」を有ち、變化性に富む素質）に、フランスの少年は殆んど全く屬すると云ふ研究結果に基いて、かゝる精神構造の質的差異の研究によつて差異的民族心理學が確立されること、かくしてそれが、民族教育の實際に役立つことは、差異的個人心理學が個人の教育に役立つと同じ意義を有つであらうと主張したのである。

この主張に於て注目すべきことは、かゝる方法によつて建設されるべき差異的民族心理學が、ヴントがおそれ拒否したやうな民族の所謂特徴の集積――これは必然的に偶然と主觀性に依存する結果を生む――に據らず、嚴密な客觀的科學として成り立ち得ることである。直觀像素質の判別は、嚴密に規定され條件づけられた實驗によつて行はれるからである。

しかし、これを以て差異的民族心理學がつくされると考へることが出來ない。それは類型學的なものであり、從つて他の觀點から、たとへば性格學的見地からの研究が行はれ得るし、又行ふべきだからである。

即ちそれは、民族性格類型學として差異的民族心理學の一部を形成すべきもの

である。しかし、かゝる民族性格類型學の可能性を指示したことは、卓見と云はなくてならない。

そして、その後のイエンシュの類型學に基きその方法を採つて研究を進めたのがラウである。

ラウは、その研究に類型學的立場による種族心理學の研究と題してゐるが、イエンシュの類型學が、たとへば道德的部面に關係せず、云はゞ自然的性格の類型學である限り、民族心理學の名を冠するよりは種族心理學の名を以て呼ぶのは、妥當であるし謙虛な態度であらう。しかし、成る程、ラウの研究それ自身は、この名にふさはしい結果（後述）のみであつても、この自然的性格がその構造的特質に應じて獨立の文化を生み出す基底たることを思へば、民族性格類型學の名は決して潛越ではないと考へる。これについては、既に觸れたからこれ以上述べないが、只こゝでは、イエンシュが最後の著書に於て、フランス文化がS型的性格の表現であることを證明してゐることを加へておきたい。

さてラウの研究であるが、五種類の檢査（眼鏡檢査その他）を實施して判定した結果、極端にして全く非統合型の人は、確かに地中海及びその他の種族には殆んど發見されず、極端に強く完全な溶解型は北方人種には見られないと云ふ結論を下してゐる。そしてギュンテル、レンツ及びクラウスによつて述べられてゐる北方人や地中海人の個々の特徵は、要するにこれら人種の基本的性格構造によつて與へられる特性と見做されると云つてゐる。

この研究は、イエンシュの性格類型學が種族の、從つてやがて民族の研究に極めて重要なる役割を演じることを示すものとして注目すべきであらう。又精神物理的及び低級な精神作用の領域に於る實驗によつて種族の本質的構造の徵候を把へ得ることを實證したものとして、イエンシュの主張を强化したものと云へよう。

もつとも、かゝる實驗的研究によつて性格類型を判定することは、最近に於る

類型學的研究に共通な方法であるが、種族又は民族に關する研究に於ては、イエンシュの示唆が嚆矢であり、ラウによつて確證の一歩が進められたと云ふべきである。

かくの如き實驗的方法による性格構造の研究に於て種族的又は民族的差異が見出されるに對し、ガースの種族的差異の心理學的研究が、各方面について吟味せるに拘らず、つひに種族間の差異を發見するに至らなかつたことは注目しなければならない。今こゝにそれについて精しく述べることはひかへるが、作業曲線に關する場合をとつて考察を進め、何等かそこに方法的過誤がありはしないかを檢討してみたいと思ふ。既に述べた如く、作業曲線に於てイエンシュ一派は明かな類型的差異を見出して居り、本質上同じ方法によつてラウが種族的差異を明かにしてゐることゝ比較することが出來るからである。

さてガースは、クレペリン式加算檢査法により白人とネグロとインデイアンに關する疲勞曲線を測定したのであるが、その際彼の用ゐた處理法は所謂平均化の方法で各人種に於て夫々二分間或は四分間毎の加算數の平均値を求め、かくてこの平均値により各人種の云はゞ平均型的曲線を作成し、これを比較したのであるが、この處理法は要素論的立場に於て無意味な、全く人工的な平均型を作成するもので、そこにはもはや被驗者の血も肉もない斷片の寄せ集めがあるのみで、死せる形骸すらも完全でないところのものである。各個人の作業曲線は全體として初めて意味があり、各二分間乃至四分間の加算數は、全作業時間の中に宿つて初めて意味を有つものであるに拘らず、要素論的立場の常として、二分間乃至四分毎の加算數を全體から切り離し孤立化させて、――既にこゝに過誤がある――即ち切りさいなむで、その斷片毎の平均値を求めたことは、作業曲線の本質を忘れ、その個人差を無視した全く無暴な方法と云はなければならない。

これに反し、シュタールシュミットの方法は、バウリ等と同じく作業曲線の全體

に被驗者の構造的特質を見ようとしたもので、作業曲線の意義を正しく把捉してゐる。そして、既に確立された九種類の檢査法によつて被驗者の類型を判別し、その構造的特質を診斷した結果を參照し、作業曲線の經過形式を檢討して、次の如き結論に達したのである。

$J_3$　その構造の確固たることゝ目的追求性が、與へられた作業を平均的・持續的に遂行することを可能ならしめる、即ち疲勞が作業に對して目立つ程の影響を與へない。從つて作業が、困憊に達するまで恒常的につゞけられ、急激な下降は、あらゆる餘力が使ひ切られた標(シルシ)となる。

$J_1$　その可塑性と柔軟性が、作業曲線に明かに表はれる。即ち、曲線が比較的急勾配をなして下降する。しかも最初から全過程にわたつて下降するのである。

$J_2$　$J_1$と$J_2$との全く中間である。全過程に下降が見られるが、比較的緩漫である。



$S_1$　曲線がこの構造の不安定性に對する證據となる。それは、作業の異常な動搖を忠實に記錄する晴雨計のやうである。それは短い時間に動搖するが、しかもその上位振動が心構への變化によつて大きな振動的動搖を示す。

$S_2$　$J_1$や$S_1$と同樣に疲勞の影響が見られる。それで曲線に急激な下降が挿入されるが、作業の減退が意識されると、これを改める。かくて前よりも強く、長くつゞく意志衝動をおこして、作業が最初よりも更に上昇することがある。

曲線そのものを示せば、直ちにこれらの特徴が明かとなるが、要するに$J_3$は終始恒常的な作業量を示すに對し、$J_1$は最初から下降の傾向を示し、$J_2$も下降はするが$J_1$の如くでなく、$S_1$は全く振子の如く大きく動搖し、$S_2$に於ては自ら生ずる作業減退を意識的に訂正するので、線の半ばに急激な下降が見られるが、その後

更に上昇する形式を示すのである。

これによれば、作業曲線の經過形式によつて性格構造の類型が診斷されることになる。そして私は、さきにこれを追吟味した結果、個人心理學的にこの可能性を確證したので、イエンシュが示唆しラウが實證したところに倣つて、方法は今述べたシュタールシュミットの研究より採り、これによつて在滿諸民族の性格類型學的研究に着手し目下續行中である。その結果は次に述べることにして、こゝで少しく、かゝる方法によつて民族性格類型學が成立し得るや否やについて再考しようと思ふ。

先づ私は、ヴントが何故に彼の所謂特殊的民族心理學を放棄するに至つたかを吟味しようと思ふ。

既に觸れた如く、彼は、「民族心理學の目標は專ら共同生活の心理學的法則性に向つてゐる」と云ひ、「民族心理學の課題は、人間的共同社會の一般的發達及び普遍妥當的價値を有つ共同的精神的産物の發生の基礎に横たはる心的過程を對象とする」と述べ、一言に「民族心(ゼーレ)の研究である」と定義して居り、人間社會の發達とその文化發生の心理學的動機に關する心理學的法則の發見を目指すものと考へ、これに對し、個々の種族及び民族の精神的特性の分析を取扱ふ部門を特殊的民族心理學とし、これを或は民族の性格學或は人種學の心理學的部門等と呼んでゐるが、一言にして「民族精神(ガイスト)を取扱ふ」もので本來の民族心理學ではないと述べ、そして心(ゼーレ)は死後形體を失ふ特別な本質で、精神(ガイスター)の複數が、現在でも尙、形體のない、しかも物質的に考へられた死者の影、或は形體を具へる肉體には決して宿ることのない高級な本質を意味するに對し、心(ゼーレン)の複類はかゝることがないと云つてゐるところに、揶揄とも皮肉とも見られる口吻がうかゞはれるが、方法的には次の如く考へてゐる。

即ち、「特殊的民族心理學は、人間の精神的素質の個別的偏異に對して一般的

性格學が求めるところを、民族類型に對して求めんとする。かくて、こゝに於て規準となるのは、主として個人心理學の見地である。多數の對象に對し統計的研究によつて平均値が求められる如く――平均的對象は或る條件の下に於てこれに基礎づけられる――、こゝに於ては、普通觀察される精神の屬性から、云はゞ平均人が構成されることになり、かくて先づ個人心理學の考察をこれに適用し、この結果を後で特に意味ある民族心理學的特質によつて補ふのである。かゝる計畫によつて進められる心理的人種學は、疑ひもなく言語學、神話史及び習慣史と共に本來の民族心理學の一つの重要な補助手段である。しかしその課題は、本質的に本來の民族心理學とは異なつてゐるので、普通云ふ一般と特殊領域との間に存する關係がこの場合には移されない。又かゝる民族の心理學的特徴づけは、民族學の普通の課題と頗る密接にからみ合つてゐるので、長い間この中に適當な地位を占めてゐた」と。

更には、「實驗心理學と民族心理學とは同時に互ひに補充し合ふ二つの部門の關係に立ち、又互ひに應用し合ふ心理學の補助手段である。……純粹な自己觀察の心理學はこの何れでもなく、不充分な方法を以てする時代おくれの處理法である。往々心理學的知識の源泉として持て囃されてゐる歴史、文學、藝術、傳記、告白錄は、心理學の部門ではなくて應用領域である。しかもそれは、理論と應用との間に常に存する交互關係の結果として、時に一般的心理學的認識を促進することがあらうとも、補助手段の性格として要求されるべきもの、即ち方法的に洗練された計畫的利用には、凡そ緣の遠いものである」とも云つてゐる。

そしてやがては、ヒツレブラントの民族性格學的研究を以て文化政策的隨筆と目し、これを科學的研究として認められないと斷ずるに至つてゐる。

これによればヴントは、初め疑問を有ち不滿を抱きながらも、尙民族性格學的研究を特殊的民族心理學として一應認めたのであるが、後これを斷定的に放棄し

たのである。

而して彼の疑問と不滿は、方法上のものである。實驗と觀察とを以て心理學の方法として、心理學に科學の地位を與へようとした彼としては、民族の特徴づけを行ふ民族性格學の採るべき科學的方法を知らなかつた。民族心理學に於る觀察をこゝに適用せんとすれば、それは隨筆的なものとなり、隨筆は調査でもなければ探究でもなく、常に單なる考察に過ぎず、考察は如何に精細にして如何に深いものであつても、科學的研究ではなく、科學を利用するか刺戟するかは出來ても、科學に代り得るものではないからである。

ましてヴント時代にあつては、性格の實驗的研究は行はれず、ヴント自ら思考の實驗的研究にさへ疑問を投げかけ、これに反對してゐるのである。實驗は主に精神物理的領域にのみ限られてゐたのである。のみならず、もしこれを民族の研究に適用するにしても、彼にあつては所謂平均人の構成以上のものとなり得ないと考へたのである。さきに述べたガースの研究がその好例である。そして、かゝる平均人に民族が盛られ得ないことは、ヴントならずとも、他の何人も肯定するところであらう。

しかし、現代に於ては事情が異なる。心理學がその後大きな發展をつゞけて、たとへば徴候學的方法の如きも成立してゐるのである。それは單に客觀的方法ではない。客觀的方法と主觀的方法との統一で、こゝに於ては、性格の如き深い層に關しても實驗が可能なのである。

只この場合問題となるのは、個人を對象とする方法で民族が把へ得るか否かである。個人心理學的方法を以つて民族性格を認識し得るや否やである。

そしてこの問題を取り扱ふ場合、先づ民族の概念から出發しなければならないが、こゝには直接、民族の生成に種族卽ち所謂血緣共同體が第一に關係すること、そしてその種族が必ずしも閉鎖的ではなく、或は歴史的に合成され、或は政

治的に一つに鍛接されることがあるとしても、一つの民族として認められる場合には、既にそこに血緣を基礎とする種族以上の云はゞ上層的。精神的共通性がそれを構成する種族的素質に加はり得ること、しかしこの場合種族的性格が如何なる程度まで改變されるものであるかゞ問題で、私としては、種族的從つて自然的血緣的な性格は上層部と異なり、本質的な改變は容易に起り得ないと考へておく。意識的精神的領域に於ては心構への變化は比較的容易であるにしても、固有意識的(或は無意識的)性格的領域に於てはその本質の改造は決して容易ではない筈である。勿論歷史的或は政治的に一つの民族として合成され、所謂民族精神にまで高められた場合には、既にそれが固有化して性格層にまで達するであらう。そしてこの場合は、種族性格の中にこれが同化されることゝなる。他面全く閉鎖的な種族は稀であるため、純粹な種族的性格の研究は一般に不可能に近いとも云へる。

しかし、何れにせよ、固有意識的部面に於てその本質が把へられることは確かである。意識の相に於ては容易に假面を冠ることが出來るにしても、固有意識の面に於てはこれが困難である。しかも、種族的性格にせよ民族的性格にせよ、それが個人意識の中に宿つてゐると考へられ、こゝに更に特殊の個人的條件によつて生成するのが個人性格の本體である。ヴントの云ふが如く、民族心はこれを成立させる個人心の產物ではあるが、しかし個人心はそれの關與する民族心の所產でないことは確かである。しかし、個人心の中に民族心が宿つてゐるといふことも、亦確實である。たとへば民族の藝術の如き、明かに個人心を通してしかも民族の特性を表現してゐるもので、それが單なる個人心の產物でないことは、民族に深く判へるものがあり、民族の間に交響し合ふ事實に、明かにこれが認められる。

そして、これが事實とすれば、個人を對象とし個人を通して、民族的性格を把へ得る筈であり、問題は轉じてその方法の成否となる。

個人性格と民族性格との識別が可能なりや否やの問題である。千葉教授は、超個人的な全體精神も、個人意識を深めることによつて把へ得ると喝破されてゐるが、これを實驗的に把へる方法はないかと考へる。これがためには個人を對象とする實驗に於て個人的なものを除去し去るといふことは困難で、むしろ不可能と云つてよいのであるから、この個人的なものから種族的な或は民族的なものを抽き出す方法を考へなければならない。

こゝに思ひ至つた際、私にはイエンシュの示唆とその類型學的方法が閃いた。その方法は實驗であり個人を對象とするものであつても、さきに述べた如く、種族的或は民族的な本質がこゝに宿るとするならば、個人間に於る同形性が見出される筈ではないかといふことである。イエンシュは、直觀像素質者の分布の甚だしい相違によつて民族の特質を識別する道を示唆したのであるが、固有意識的特質――こゝには個人發生的に固有化せるものも含まれる筈であるが――は、もしありとすれば、各個人に於て同形的にあらはれる筈であると考へられる。それは單に、分布の百分率と云ふよりは、種族的乃至民族的なものゝ徴候が、同形性として個人間にあらはれる筈のものである。勿論、純粹にかゝる特質を抽き出し得ることは困難であり、結局その同形性の割合が標徴となることがあつても、從つて處理上イエンシュの如きことになつても、本來の目的は、この同形性の發見にあるとしなければならない。

しかも、イエンシュの類型學の本質は、人間存在の根本形式であり、精神構造の基本的特質を把へるにあり、かゝる精神構造の基本的特質こそは、意識の象面に於る皮相的なものではなくて固有意識的なものである。（又シュルツエの類型の所謂根本態度といふのは、たしかにかゝる性質のものと考へられる。）

それ故私は、イエンシュの方法を借りることによつて、民族の性格類型學が成り立つと考へるに至つたのである。個人を對象とする實驗に於て、そこに種族的

乃至民族的固有意識的な同形性を發見し、こゝに類型學を建設しようとするのである。

既に述べた如く、ラウはイエンシュの方法により北方人種と南方人種との構造的特質を見出したのであるが、彼の志向したところは結局極端な類型の分布狀態の研究にあつたと考へられる。かゝる分布の問題以前に個人間の同形性に重點をおくべきであるのに、イエンシュの示せる道をそのまゝ通つて、こゝに考察を向けることをしなかつた。單純に、個人を對象としてその精神構造の特質を判定して、各類型の分布を以つて種族的性格を把へたのである。もつとも類型の性質上同形性の把捉と結局大同小異となるが、しかし、目標は本質的に異なる。一定の類型に所屬する個人の多少を直接問題とするのではなくて、同形性そのものゝ見が直接の課題たるべきである。分布の問題は、その處理上のことである。

かくして初めて、民族性格類型學の成立する理論的根據が得られると思ふ。こ



こに生れる種族乃至民族の差異的研究は、かのガースの採れる立場とは全く異なるものであることは云ふまでもない。そして、もしヴントにして今日あらば、恐らくは彼の差異的民族心理學觀も訂正したことゝ思ふ。

以上により、民族性格類型學の成立根據が略々明かになつたと思ふが、實際用ゐる方法も、イエンシュ一派と見解が異なることを加へなければならない。

イエンシュ及びその一派が、實驗的研究の中心點を知覺の領域におくことは既に述べたところであるが、その理由は、知覺が精神作用として高等でもなく下等でもなく中間の層に屬し、實驗的研究に特に便宜な支持點と考へるところにある。即ち、それは實驗が到達し得るのみでなく、他方廣い領域にわたつてそれよりも高い領域及び低い領域に對する結論を許すし、のみならず人間の外界に對する關係はその精神的生活を規定してゐるのであるが、知覺領域は第一にこの外界との結合をなし、知覺機能の構造は、又精神生活の他の層に對する外界の干渉可

能性に對して大なる意義を有つてゐると考へるところにある。

この考は、イエンシュが人間と外界との關係を基礎としてその類型學を建てた限り、即ち人が外界に統合するか（外的統合型、即ちさきに述べた溶解型）内部に統合するか（内的統合型即ちさきの非統合型）といふ觀點を採る限りに於て、必然的に到達するところであるが、しかし、前述の如く固有意識的層に於る同形性を見出さんとする立場からは、知覺領域に於てはその充全を期し難い。知覺の機能よりは一層根本的な機能について實驗すべきである。固有意識的なものと一層密接に關係する機能について吟味すべきである。所謂性格と直接關係する領域に於て實驗を試むべきである。知覺の如き中間領域に於ては、個人的或は意識的特質があらはれ易いと考へられるからである。

それ故私は、民族性格類型學が意志的側面に於て實驗を試むべきであると考へる。意志機能は性格の徵候として最も適切なものだからである。

かく考へる時、私はシュタールシュミットの疲勞に關する類型的差異の發見に關心を有たざるを得ない。彼は疲勞曲線の研究としてゐるが、根本的にはむしろ意志が問題となつてゐると考へざるを得ないからである。「全力をあげて計算せよ」との示教即ち命令に對して、しかも二時間にわたる作業に於ては、單なる意識的意志に止まらず、固有意識的性格が表現されると考へられるからである。危機的場面に於ても各自の本質が露呈されるものであるが、繼續的作業に於ても本質的特性が顯現するものである。短時間の檢査に於ては意識的作用が支配し得るが、長時間の作業に於ては自ら各自の本質に基づかざるを得なくなる。

それ故、固有意識の深相を、尠くともその分肢的徵候をひき出すためには、シュタールシュミットの研究法の如きものを採るべきである。實驗の條件として危機的場面の構成が困難なる限り、繼續的作業の檢査法をとる以外に、固有意識的性格を實驗的に診斷する方法がないのではないかと考へる。

尠くとも私は、民族性格類型學はかくの如き立場と方法によつて成立し得ると考へるものである。それ故、かゝる考想の下に在滿諸民族の性格構造を研究せんと企圖し、目下繼續中ではあるが、その一部について報告したいと思ふ。

## 九　在滿諸民族の性格構造

種族乃至民族的な性格が個人の固有意識界に宿るとし、これを比較的長時間の作業にあらはれる個人間の同形性を通して把へようとした私は、クレペリン式加算檢査を一時間にわたつて繼續させ、各三分毎の加算數を基礎として作業曲線の形式を吟味し、滿系、漢系、鮮系、蒙系各民族の夫々に於て共通なる同形性が見られるや否やを研究したところ、そこに興味ある關係を發見した。

即ち、各民族に於る各個人の作業曲線は、云ふまでもなく千態萬樣とも云ふべきもので、全く個性的なものであるが、しかし類型學的に判定すれば、極めて明瞭に同形性が見られたのである。この場合、作業曲線の類型別はシユタールシユミット（及びレッペル）の結果を參考としたのであるが―、そこに對應するもの

がない場合もあつたが―、次の如く區別された。

先づ最も明かに同形性が認められた漢系について云へば、漢系に於ては動搖が殆んど認められないか、或は漸次減退する傾向を示す曲線（J的曲線）は殆んどあらはれず（五％）、約七〇％に近い個人間の同形性的曲線として、作業の半ばに著しい減退が一時見られ、後再び作業量が急激に增大し前半に於る最高量以上に及ぶもの――これは作業の減退を意識して補償作用によつて復活せることを示す――、これと曲線の形式そのものは異なつて、最初より次第に上昇の一路をたどり、最後に近く更に急激に上昇するもの――これは初めから計畫的な補償作用による特性を示す――（$S_2$的曲線）が明かに把へられたのである。殘餘のものはシュタールシュミットの類型別曲線により何れとも決し難いもので、それ自身一つの同形的特質を有つ（中間型）とも解されるが、種族乃至民族的同形性が個人的特殊事情によつて著しく影響されたものとも解される。

しかし、何れにしてもこの結果によれば、漢系民族に於ては、J的曲線ではなくて$S_2$的曲線が同形性として認められると云ひ得ると思ふ。

これを徵候學的に診斷すれば、漢系民族は矛盾的。補償的性格構造を有つと云ふことになり、更に具體的に云へば、外的統合核を有ち（端的に云へば中核體を有たず）、構造が軟かで順應性に富み、主觀的。動搖的ではあるが知的補償が强く、興奮感情移入は容易なのであるがその表現は抑へられ、又形式主義に陷る弊があるわけである。

次に蒙系に於てはこれと反對の結果が見られ、S的曲線に於ては同形性が認められず（五％）、J的曲線に於て同形性が看取された。七五％がこの曲線に屬するものだからである。それ故、蒙系は漢系とは丁度反對で、S型でなくてJ型であると診斷される。不明な型も二〇％に滿たず、比較的診斷が容易であるが、しかし、同じくJ型であるにしても、約三〇％が$J_1$型――最初の三分間が最高量を

示し、その後遞減する特徴のある曲線――たることは見のがすことが出來ない點である。卽ち、蒙系は統一的性格を有ち、內的統合核を有つところに特徴があるが、弱い矛盾的性格であり主觀的。動搖的性格である$S_1$型と最も近い$J_1$型が含まれてゐるといふことである。しかも$J_1$型は全く蒙系に獨特な、他には（私の研究した民族內に於て）見られないものである。

これに對し、滿系に於ては$J_2$乃至$J_3$のみが六〇％を突破して、$S_2$が約一〇％たることを考へれば、滿系こそ、比較的嚴密に云つて內的統合核を有つ民族であると云ふことが出來る。卽ちその種族的同形性――この場合特にかく云ふのは、純粹と見られる人を對象としたからである――は、動搖の少ない、他面上昇することも少ない曲線に於て見られるのである。

從つて滿系は、構造の固い順應性の少ない民族であると云ふことが出來る。同時に蒙系とは近親性を有つ民族であると考へられ、他方、漢系とは緣の遠い性格であると判定される。

最後に鮮系について云へば、今までのところ同形性の發見は困難である。卽ち、一定の曲線の類型に於て同形性ありと判定し難い分布を示してゐるのである。精しく云へば、$S_2$型的曲線が約四〇％J型的曲線が約二〇％で比較的に云へば$S_2$型的であると云ふことも出來るが、同形性を問題とする場合この百分率の關係からは結論を下さないのが妥當であると考へられる。のみならず判定し難い曲線が四〇％以上に達してゐるのである。

それ故鮮系に關しては、强ひて云へば漢系に近いと云へるが、滿系的な分子も無視することが出來ず、簡單に最大頻數に卽して云へば判定し難い型となる。或は鮮系に於ては、固有意識的領域に於る同形性のないところに――J的曲線も個人的特殊條件によつて生れたとも考へられるから――特質があると云ふべきであるかも知れない。そして、これは$S_1$と近親性ある特質であると考へることも出來

るから、S的性格を有つと云ふべきかも知れないが、しばらく判定をひかへておきたいと思ふ。

もつとも、嚴密に云へば、各々百名前後について行つた實驗であるから、全部について尙結論的判定をひかへるべきかも知れないが、鮮系を除いては、特に漢系に於るが如き、明かに同形性が見出されるのであるから、必ずしも尙早な結論と云ふことは出來ないであらうと思ふ。

さて以上に於て私は、在滿諸民族のうち滿系、漢系、蒙系、鮮系について、その性格構造を類型的に判定したのであるが、重ねて注意しておきたいことは、それが云はゞ自然的或は基本的性格構造であることゝ、それが類型學的に把捉されてゐることである。

そして自然的性格構造は、上層的性格の、たとへば道德的性格の形成にあつても重要な役目を演じ、一般的に云つて內外の諸條件に對する反應を異ならしめる要



因なのであり、從つて所謂性格學的研究に於ても必ず參考とすべきことであり、又類型學的把捉が「あらゆる牛を黑くして牛の特徵を却つて把へ易くさせる夜」の如き働きをなして性格學の前段階として要求されるべきであり、從つてこの意味に於ても、性格學はかゝる結果に俟つべきであるのである。

事實、漢民族に關するヴントの所謂隨筆風的民族性觀の混亂も、前述の如き漢系民族の矛盾的・補償的性格構造たることを知れば、その混亂を整理する端緒を得るであらうし、更に精しく從來あげられてゐる漢民族の個々の特徵を考へても—特に自然的性格の特徵と目されるものについて—一々うなづかれることゝ考へられる。矛盾的・補償的性格たることを知らずに、斷片的觀察の結果を見た場合にのみ、混亂があり矛盾があるのに驚くのであつて、その基本構造を理解すれば驚かされる何物もないのである。

更に滿系、蒙系に關しては比較的一致せる民族性觀があることは、その統一的

性格構造に基づくものと理解されることにならう。

そして、かゝる民族性格を認識すれば、そこには自ら民族の職業適性の問題にも示唆を與へることが出來る。眞の職業指導はもはや單なる目や手の特性にのみよるのではなくて、あらゆる行動の基礎たる性格から出發するからである。個々の職業に對する特殊な適性の存することは云ふまでもないが、本質的には性格構造が根本となるからである。況んや性格構造の認識は、精神的特性の認識・診斷を許すにまで發達してゐる現在に於ては、尠くとも類型的に職業指導が可能なのである。そしてこゝに民族的職業心理學の基礎が形成され、その出發がある。

又教育の實際に對しても、民族性格類型學は示唆を與へることが出來る。たとへば、柔軟な構造を有ち、順應性と可印象性とに富むS型に對しては、その矛盾精神と拒絶症的傾向を考慮して、「指導」の印象を目立たせない限り、教育的影響の大なる效果が期待される。しかしこの效果は、深い層にまで及び難いのが一般である。構造の柔軟性のために、偶然的な事柄によつて、廣く云つて何等かの環境の影響によつて、すべて獲得されたものが無に歸するか逆轉する傾向があるのである。

これに反し、構造の固いJ型は、容易に教育の效果はあらはれないが、その深い層にまでこれが及び得るので、一度こゝに及べば持續する本質を具へてゐる。かくの如く考へれば、民族性格類型學の發展は民族教育の實際にも貢献出來ることが知られる。

しかしこれらについては、何れ稿を改めてまとめようと思ふ。こゝでは、民族性格類型學的研究の一つの例として、且つその意義を述べるために少しく述べたのである。

## 一〇　心理學徒の任務

「一民族、一國家、一指導者」曾つて盟邦ドイッに於ては、この標語の下に國民運動が展開された。內外の事情・條件によつて生み出されたものではあらうが、些か偏狹な主義である。又Sを以て反對類型として非難し、$J_3$と$J_2$の中間が理想的ドイッ型であるとの主張が行はれた。類型學の危機である。

畏くも、民族をして各々その所を得しめると仰せられたる　聖旨を奉戴する皇道精神の下に於ては、一を採り他を捨てんがための民族の研究であつてはならない。各民族の特質を知り之を生かすためのものである。八紘一宇の　御精神はここに實現され、かくして人類の眞の發展と向上が期待されるのである。

又複合民族國家たる滿洲國に於ては、何よりも先づ、各民族をして國民的場に立たせる訓練が要求され、國民的場に於る協和が先決條件であり、こゝに日滿一德一心の王道樂土が建設され又されつゝあるのであるが、これがためには各民族の特質を認識しなくてはならない。各民族の特質を知らずして效果的政策も運動も成立し難いからである。

即ち、協和運動を中心とするあらゆる國民的運動の展開にあたつては、その滲透・徹底の前提として各民族の性格構造の認識が要求される。性格構造の相違により、敎化の方法及び效果に關して自ら異なるものがある筈だからである。

各民族の性格構造の認識は、のみならず國防國家體制の一つの基礎ともなり得るし、又ならなければならないであらう。複合民族國家なるが故に、たとへば民族的職業配置の如きも考慮されるべきであり、しかもその根本認識は性格構造の認識にあり、あらねばならないからである。當來國家の特質はかくして發揮され類なき躍進が約束されることゝならう。

東亞共榮圈の建設も亦、同じ方途をたどることによつて、單なる物質的共榮圈に止まることなく、精神的な眞の共榮的共同體として確立されるであらう。

民族性格學、その前提としての民族性格類型學、廣く現代の民族心理學は、この道に於て報國と興國の責務を果たすべきであり、又果たし得ると思ふ。

そして私は、滿洲國の心理學徒に對して課せられた緊急にして最大の任務は、實にこゝにありこゝにあらねばならないと考へるものである。

尙最後に、千葉教授の御指導と、福富教授並びに安倍教授の御鞭撻に對し、深い感謝の意を表して拙い稿を終りたいと思ふ。

（康德九年十月二十七日）

——如何なる力も、時の經過も
刻み込まれたその姿を打ち碎くことが出來ぬ、
生々と自ら發展してゆくその「原型」を——。

（ゲーテ）


新秩序建設叢書

第一册　大東亞戰の意義　建國大學名譽教授　作田莊一
第二册　東亞解放史上に於ける日本と支那　建國大學助教授　井邊房夫
第三册　滿洲事變とその歷史的意義　建國大學助教授　高橋臣四郎
第四册　大東亞新秩序の世界史的背景　建國大學助教授　松山茂二郎
第五册　米・ソ東亞政策の基本路線　建國大學助教授　山內一男
第六册　反共讀本（非賣）　建國大學研究部員　田川博明
第七册　現代科學と滿洲國學　建國大學名譽教授　作田莊一
第八册　民族性格類型學　建國大學助教授　澤田司
第九册　大東亞共榮圈の歷史性　建國大學助教授　森克己
第十册　大東亞共榮圈の廣域法秩序　建國大學教授　村井藤十郎
第十一册　世界秩序の地理的動向　建國大學教授　宮川善造



康德九年十二月十日印刷　初版七〇〇〇部
康德九年十二月十五日發行　㊀四十五錢　送料四錢

（新秩序建設叢書）

民族性格類型學

編纂　建國大學研究院　新京特別市大同大街
發行者　大間知篤三　新京特別市南嶺第五官舍二八號
印刷者　印刷廠　新京特別市吉林大路
發行所　滿洲帝國協和會建國大學分會出版部　新京特別市大同大街